

友会とのダブルキップであり、これまで通り隊友会と共同での活動は可能であろうとの意見だった。また、態勢強化策として、副会長一人の追加と事務局長の人選が必要とされた。陸修偕行社への要望事項も挙げてはとの意見もあつたが、今回は問いかけられた三つの問題への回答だけに絞るべきとの結論に達した。

写真撮影の後、引き続き懇親会は9名の出席となった。約2時間の会話は、今後の会運営は益々厳しさが増す状況となることが確認された。弘前市の状況をもてこの8年間で2万人の人口減少があり、デパート、老舗のホテル、和菓子屋、本屋などが閉店し寂れるばかりであるとか、5年に一度の国勢調査を務める調査員からは留守家庭が多く調査が困難な状況が、町会長からは町会運営の厳しさ、民生委員のなり手がいないことが、地域社会福祉関係者からは助け合い募金、赤い羽根募金集めの厳しさが、地区保護司会会長からは保護司のなり手がないうことなど愚痴の語り合いとなった。来年春の花見は旧弘前偕行社での開催を諦め、安原第二児童公園で行うことを告げ、再会を期してみつわ会館を後にした。

北海道偕行会全道大会

北海道偕行会（代表世話人陸自65期木村清順）は第80回北海道偕行会全道大会を、ご来賓に北部方面総監部幕僚副長・

田中仁朗陸将補、講師に北海道偕行会会員・北海道美唄市議会議員齋藤久美夫氏（陸自90期）をお招きして、11月8日（土）「アパホテル札幌大通駅前南」で開催した。前段行事の講演会には札幌・真駒内・苗穂・東千歳・南恵庭・俱知安・美唄の各駐屯地から現職幹部・陸曹自衛官12名の出席を得た。各修親会長及び部隊長のご理解・ご協力の賜物である。

齋藤氏の講演は「硫黄島戦没者遺骨収集派遣（第一次）に参加して」を演題に、①派遣の目的、実施期間・地域、②派遣団の構成、任務、③遺骨収集作業、④硫黄島滞在中の生活⑤派遣団の輸送（移動）方法、行事関係について1時間半、本年7月、2週間に亘る遺骨収集の実体験等を踏まえての熱弁を拝聴した。その中で、①硫黄島全島をグリッドで切つて、しらみつぶしの調査・収容している。②遺骨に対する「敬意」に特に気を遣つ



齋藤久美夫氏講話

ている、「遺骨を跨ぐなどもつての外」
○専門の「遺骨鑑定人」がいる。
○遺品はもちろん、自然物も持ち出し（私有）禁止である。
○重要でない遺品（ポタンなど）は元の場所に「理め戻す」こと。
○派遣間、健康管理には万全を期すこと（例、毎日検温する）。

○15日間で23体の収容であれば、残るご遺体（9000?）の収容完了は何時になるのか。

硫黄島だけでなく「大東亜」が戦域なのだから、その収容作業は想像もつかない長期戦になる。との言葉が特に印象に残った。

また、齋藤氏の言葉通り、遺骨収容作業は国家の義務であり、子々孫々に歴史を継承しなければならないという、社会的・教育的に重要な意味があると思つた次第である。

聴講者からは「テレビや新聞などで報道されていない内容を知り、遺骨収集の困難な実態を身にしみて感じた思いがした」とか、「今後は、硫黄島だけでなく南方及びアリューシャン方面における遺骨収集の実態にも関心を持っていきたい」との感想があつた。このような感想を踏まえ、今後、北海道偕行会の活動においては現職幹部のみならず曹友会との結びつきも深め、安全保障問題の普及、現職隊員に対する協力、英霊の慰霊顕彰、殉職者の

追悼、戦没者の遺骨収集等について推進していく必要があることを再認識した。

後段行事は国歌斉唱、今回お知らせをいただいた物故会員3名への黙祷の後、田中幕僚副長のご挨拶があり、「北海道自衛隊殉職者追悼式、北部方面隊創隊記念行事、各地の慰霊祭参加など諸行事に対する北海道偕行会の活動に敬意を表し、陸修偕行社、北海道偕行会のさらなる発展を祈ります」と陸修偕行社及び北海道偕行会の活動を評価していただいた。

次に、当会会員であり、前衆議院議員高木宏壽氏から自衛隊員の処遇改善方向等、国政に関する説明があり、同氏の発声で乾杯ののち歓談に移った。

参加者各人の近況報告では、「北海道



内の忠魂碑、慰霊碑を調査して本を上梓しました」「在職間、ラグビーに精魂を傾けて大きな成果を得ることができました」「映像作家として部隊DVD、カレンダーを制作しています」「隊友会支部長を兼ねて陸修偕行社のPRに努めています」などの紹介が続き、参加者から驚き・感銘の言葉が上がった。

法人賛助会員として参加していただいた夕張のホクキューパツク(株)の野田清道会長からは、「今回2回目の参加です。かねがね自衛官、自衛隊の素晴らしさを感じて居りますが、今日は貴重な講話を拝聴できたとともに、自衛官OBだけでなく現役の皆さんとこのように歓談できうれしく思います。会社の若い者にはぜひ自衛隊で鍛えていただきたいとも思っています」との心強い挨拶があり、場を大いに盛り上げていただいた。

和氣藹々の雰囲気の中に定刻を迎え、恒例の「隊歌演習」は北部方面隊歌「お拓け行く北海の……」を、幕僚副長を中心にして大合唱、締めには参加者の中で一番若い真駒内第11高射特科隊宮川1尉の音頭で意気軒高に万歳三唱、来年の再会を約して大会の幕を閉じた。

本席では旧軍関係者とのお会いできることを楽しみにしていたが、今年も参加がなく残念至極であった。

北海道偕行会の今年度の事業は、本大会を以て大きな活動を終了した。来年度

以降も、会員相互の融和と団結を図り、現職隊員とのつながりを広げつつ、各地慰霊祭で英霊に敬意を表し、講話等により安全保障関連の普及を図り、創立記念行事及び追悼式での現役支援に尽力する所存である。

懇親会参加者(既出者を除く)は、75小島肇・井上和男・相馬隆義・鎌田順一朗・齋藤修二、76佐々木政弘、86斗賀山信美、104北田勝二、俱知安駐屯地司令田中2佐、東千歳駐屯地菅原隊員

(73細島邦夫 記)

広島県偕行会

令和7年度の集い

広島県偕行会は、令和7年12月1日(月)、11時半から12時半過ぎにかけて、総会及び懇親会の、楽しい集まりを開きました。

会場は、全国でも珍しい市内電車が自然に2階に上がる広島駅の北側・新幹線口の、道路越しの北西「グラノード広島」の2階、居酒屋「八香閣」の一部屋でした。会費は、5500円(年会費、懇親会費、玉串料等を含む)でした。

お集まりの面々は、井上廣司会長(陸士61の戸塚新さん亡き後の満3年間、平成30年夏までの「偕行」編集委員長、陸自72、写真前列左から3番目)を初めとして、木船久幸(陸自68、後列4)、田所恒之輔(陸自69、後列1)、奥田虎昭(陸